下田まち遺産を次世代へつなぐ

現在（令和２年10月末現在）、下田まち遺産は154件を認定し、内14件が「下田登録まち遺産」となっています。下田まち遺産は、先人たちより現代に暮らす私たちが受け継いできた、下田の誇りであり財産です。これらを次世代へ伝えるべく、日々奮闘されている方々を取材しました。

case 1 蔵をカフェにリノベーション。7年継続してきた秘訣は“気負わずゆっくりやること”

※店名は「くしだ蔵」、下田登録まち遺産での登録名は「櫛田蔵」となります。

下田登録まち遺産である櫛田蔵は、７年前にリノベーションし、カフェとして活用されています。実際に活用されてきた上で感じたことを伺いました。

全体を通じて印象に残ったのは、オーナーである櫛田夫妻が口にした「特別なことをやろうと思ったことは１度もない。」との言葉で、「気負わずゆっくりやっています。」と笑顔で話されるお２人を見て、考え過ぎず、自然体で続けてきたその姿勢が、ゆったりとした建物の雰囲気と調和され、７年間続けてきた秘訣が何となく感じられました。

気さくな櫛田ご夫婦。２人の笑顔に癒され、心落ち着くのも櫛田蔵の魅力。

１階の天井を部分的に取り払い、吹き抜けとしたことで蔵の小屋組と天井の高さを体感できる。

飲食店として、集客をすることは大事なこと。看板メニューの「北インド風骨付チキンカレー」はカレー研究家の方から教わったもので、オープン当初からの人気メニュー。スイーツとして提供しているケーキはご主人が担当している。

エアコンだけでは蔵内が暖まらないため、ストーブを設置。煙の排出対策として、ペレットというほぼ無煙の燃焼剤を使用している。

床材は改修費を節約するために自ら購入し、職人さんと一緒に施工したとのこと。

継続して活用したからこそ分かる歴史的建造物の魅力と不安

ご夫婦で仲良くお店を切り盛りされている櫛田さん。歴史的建造物である蔵を活用し続けたことで、新たな魅力と古い建物特有の不安を口にされています。

【魅力】

・建物内で飲食ができることで、伊豆石や蔵の内部など、建物の特徴を直接体感することができる。

→来訪者にとっては、建物の外観だけでなく内部も見ることができ、とても貴重な体験ができます。特に外国人観光客から好評を得ているとのことです。

【不安】

・歴史的建造物であるがゆえの劣化や、伝統的な技法による修繕を行う職人の確保が大変。

→現代建築とは異なり、長い年月が経過したことによる建物本体の劣化や、職人の高齢化により、適切な維持修繕が難しい状況にあります。

・次の世代にどのように残していくか。伝えていけるかという心配。

→歴史的建造物に限った話ではありませんが、後継者問題も課題です。

櫛田さんが開催するライブは、来訪者が建物内部を体感できる活用例。

経年劣化により損傷の激しい北側外壁。職人不足や後継者の問題から改修の目途が立たない。

歴史的建造物活用について設計者に聞く

小川 弾 さん

櫛田蔵をリノベーションした一級建築士で、駒沢女子大学人間総合学群住空間デザイン学類講師の小川弾先生にお話を伺いました。

櫛田蔵をリノベーションしたのが今から７年ほど前になりますが、この７年間で歴史的建造物の保存や活用が全国的にも盛んに行われるようになりました。その地域“らしさ”を象徴する建造物を活用することで、新たな観光資源やまちづくりの拠点となっています。櫛田蔵の改修では、「伊豆石を可能な限り見える状態にする」ことを念頭に置きました。飲食店の設備である、調理場とトイレを集約したことで、壁面の伊豆石を見やすく、また、改修費を節約することもできました。

櫛田蔵のような歴史的建造物は、地域のまちなみを形成する重要な要素で貴重な存在です。今後、こうした取組みは、その地域の皆さんと専門家とでネットワークを構築し、“地域ぐるみ”で守り、活用していくことが大切だと思います。

経年劣化による伊豆石壁面の雨漏り跡。

歴史的建造物活用の可能性と課題

今回取材した櫛田蔵のケースは、歴史的建造物の活用事例として、１つのモデルケースであると思います。また、オーナーの櫛田さんから伺った維持管理上の問題があることも事実であり、こうした建造物が抱える共通の悩みです。

観光のまちである下田は、幕末開港から残る歴史資源に恵まれた土地で、それらを象徴する「なまこ壁」や「伊豆石」を使用した建造物が建ち並ぶ“まちなみ”は、他の地域にはない「下田らしさ」を表現しています。これらをいかに維持し、次に繋げていくのかが大きな課題であります。市では、皆様から寄せられたふるさと納税を原資とした助成制度を設けております。本誌裏表紙に掲載しておりますので、ご覧ください。